

## ま え が き

本園では昨年、文部科学省より3年間の『「暮らしづくり」の視点から幼児期に育てたいことを明らかにし、教育課程の改善をはかるための研究開発』の指定を受けました。2年目の今年は初年度の研究成果を踏まえて更に発展させて、『「協同性」を軸にしての、幼稚園での「暮らしづくり」を考える～教育課程の改善に向けて～』という研究主題で、無藤先生（お茶の水女子大学教授）、榎沢先生（淑徳大学助教授）、青柳先生（本学助教授）をはじめ、多くの先生方のご指導、御助言をいただきながら教職員一丸となって研究に取り組み、ここに2年間の成果をまとめることができました。

私は若い頃、自治医科大学の解剖学教室において、間藤先生（解剖学主任教授）のもとで6年間ほど研究員の生活をし、スポーツや運動との関係で人体の筋腹の位置や筋の付着あるいは関節の発生の仕組みについて勉強をしていました。間藤先生は「マトウ細胞」（マトウ細胞とは脳の血管の外側にへばりつき、脂肪やタンパク質などのゴミを掃除して脳を守っている特殊な細胞のことで、痴呆や動脈硬化の原因の一つと考えられている）の発見者として国際的にも著名な先生です。

この間藤先生は日頃、研究に対する取り組む姿勢として、次の3点が重要であることを強調していました。①常にファイト・意欲を持ち、より良い成果をあげるために研究テーマを意識し続けること。常に考えていれば良いアイデアがでてくるものである。②研究テーマに対してアプローチを間違わないこと。そのためには関連文献、先行研究の内容を良く把握しておくこと。③良い結果が得られてもそれに慢心しないで、それを励みにして更に発展をさせること。もし思うような結果が出なかったら多分にアプローチの方法が間違ったかも知れないので原点に戻り、アプローチを考えて再度ファイトを持って立ち向かうこと。失敗をしても言い訳をしたり、他人のせいにはしないこと。

このような研究に対する姿勢は、どのような分野すなわち解剖学の研究でも幼稚園の研究でも同じだと思います。私は、この1年間、本園の先生方の研究を見ているだけですが、先生方のより良い成果をあげるために努力を惜しまない姿勢には頭が下がる思いです。ただし私は幼児教育、保育、教育課程などという分野は素人ですので、本報告書の内容が研究主題と一致しているのか、アプローチの方法はこれで良かったのか、方向性はこれで良いのかなど残念ながらよくわかりません。多くの専門家の先生方の御指導、御助言をいただいているので、良い出来映えであることを確信していますが、いろいろな見方、考え方がありますので、是非本報告書を御一読していただき、忌憚のない御意見や御教示をいただければ幸いです。私達はそれらを今後の励みとして、3年目のまとめが更に良い研究となるよう立ち向かいたいと思っています。

宇都宮大学教育学部附属幼稚園園長

石 崎 忠 利